

# 日本文化史教育の重要性

今井雅晴

日本語・日本文化学類長 歴史・人類学系教授

現代社会に対し、教育界はどのように対応したらよいであろうか。私は専門が日本文化史で、日本語・日本文化学類の担当であるので、本稿では日本文化史教育の重要性という観点から発言したい。

## 危機的な経済状態

ここであらためて申すまでもなく、日本は経済的大繁栄の後の危機的な状態に落ち込んでいる。企業は次々と人員整理の案を発表し、すぐさま実行に移している。退職希望者を募れば、その後の生活の困難が予測されつつも、あっという間に予定人数をオーバーしてしまうそうである。失業率が5パーセントを越えたと、20人に1人が失業しているとマスコミは報じている（2001年8月末）。学類の学生の就職が非常に困難になっていることも、経済の悪化を実感させる。また精神的荒廃を思わせる事件も多発している。

## バブルの時代の反省

考えてみれば、日本が繁栄しているうちに次の手を打たなければいけなかったのである。バブルがはじけたというのは1992年のことであったが、そこに至るまで私たちは何をしてきたであろうか。私たちはひたすら経済の発展をめざし、世界に出かけていった。資源の貧しい日本に籠っていたのでは豊かさは限度があったからである。

経済発展をめざしたのは、誤っていたということではない。第二次大戦後の貧しさから脱するためには、私たちは一丸となって工夫・努力せざるを得なかった。そして成功した。しかしその結果、私たちは多くのものを失ってしまった。

バブルの時代、私たちは急速に外国のことを知るようになった。そこには日本とは異なる文化があった。ここで文化というのは、例えば絵画や音楽などの狭い意味ではない。それも含めて、政治・経

済・社会など、人間の生活そのものを意味している。私たちは、世界各地のそのような文化を尊敬の眼で見たであろうか。いわゆる後進国の文化を、奇妙なあり方であると低くは見なかったであろうか。また、これもいわゆる先進国の文化のなかで日本と異なる習慣を見つけ、「それは改めるべきだ」と高飛車に発言しなかったであろうか。

私たちは、外国に行って、物価が「安い安い」と大喜びをしていないだろうか。私たちは、かつて日本に来た欧米人の<豊かさ>に複雑な気分だったはずである。それがいつの間にか逆転してしまった。現在の私たちが「安い安い」というときの、外国の人たちの決してうれしそうではない表情に気がつくべきである。バブルがはじけても、依然としてバブルの時代を基準とし、その時代に戻りたいとしてもがきつつ、十年が過ぎた。そして日本経済は底なしのドロ沼に落ち込んだ。すでに遅すぎるかもしれないけれど、私たち教育にたずさわる者は経済発展第一主義を改め、それを支えてきた科学技術の発展を至上命題とするあり方も、考え直すべきである。

### 日本文化についての自覚の不足

実際問題として、私たちはすっかり自

信をなくしている。第二次大戦後、「よい」と思ってしてきたことが最悪の結果を生んでいるからである。私たちには精神的な充実をめざす半面が大きく欠けていたのである。その原因は、伝統的文化に対する自覚的教育が欠如していたことにあると考える。

例をあげるのは簡単なことである。私たちが海外へ出かけていき、現地の人たちと交流したとして、必ずずねられるのは日本の文化についてである。そして私たちはそれに満足に答えることができない。

細かい話になるが、外国人に歌舞伎や能楽について、あるいは演歌について説明を求められた時、まともに答えられる人はどれだけいるであろうか。短歌について、また法隆寺について、どのくらい答えられるであろう。さらにはまた、「日本には仏教があり神道があり、また他の宗教もあります。どうも日本人は信仰心が薄いと思われませんが、いかがでしょう」と質問されたとき、まともに反論できるであろうか。この質問には、「信仰心が薄いことはよくないことである」という価値観が込められている。

私たちは、外国の人たちの主張や質問にまともに答えないことで経済的繁栄を果たしてきた。しかし、私たちは自分自

身を知らなすぎ。そのため、経済が悪化しただけで自分自身のよって立つところについても自信を失っている。過ぎてしまったことは仕方がないことであるが、ではどうすればよいのか。

### 文化史教育のあり方

私たち自身も受けてきた文化史に関する教育について、別の例を挙げて振り返ってみたい。

例えば、私たちは鎌倉時代の仏像についてどのように学んだであろうか。座像・立像などの区別、高さ（像高）、あるいは木造などの材質、誰が作ったか、などについては学んだはずである。しかし、その時代の人びとがそれぞれの仏像にどのような願いを込めていたか、まともにも考えたことはあったであろうか。形態が先にあるのではなくて、人びとの信仰心や願いが形態を作らせたのである。

私たちは『徒然草』で隠遁について学んだ。著者の吉田兼好は世を遁れ、隠遁生活を送ったと学んだ。それは何か現世で失望したことがあったからである、それはこれこれこうだ、と教えられた。しかしそれだけでは、世間的に失敗した者の繰り言を聞かされてうんざりするだけである。しかし、そうではない。中世には、経済的豊かさより貧しさの方が人間

生活を豊かにするという価値観があったのである。そして教師はそこまで勉強して生徒に教えなければならない。

また第二次大戦後、公立の学校において宗教に関する教育はすっかり影をひそめた。宗教教育には問題が生じる危険性があるが、特に歴史の授業において、宗教に関する話題は取り上げられるべきであろう。それが非常に不足しているので、寺院や神社には単なる文化財としての興味しか抱かないようになってしまう。実は、寺院や神社はそれぞれの時代の人びとが信仰を語り合う場として機能してきたのである。まず、そのような観点から話題にすべきである。

### 今後の方向

もとより私は精神主義に陥るつもりはない。ただ現在の社会のなかで、日本文化史を上記のように教育することが、海外で、それから国内での異文化に柔軟に対応できる道であると考え、さらにはこれからの私たちの生きる方向を見いだしていけるのではないかと考えている。日本語・日本文化学類でも、そのような自覚に立って教育を進めていきたいというのが私の意見である。

(いまいまさはる 日本文化史専攻)